

さくらびと

北に帰つた人たちが残していったもの

細川呉港（会員）

30年ぶりに函館のいとこに逢いに行つ

た。85歳の女性である。今は引退しているが、大きな病院の総婦長を長年勤めてきたので歳をとつてもしつかりしている。若いとき、といつてもまだ未成年のとき、看護婦見習いとして満洲の本溪湖の病院に行き、終戦のとき病院ごと八路軍に接収され、軍とともに満洲を点々と。蒋介石軍に追われて鴨緑江を越え、朝鮮に逃げたこともある。朝鮮に入れば、蒋介石軍は入ってこないから安心だといわれたという。紅軍に接収された病院は、病院長も医者も、そして彼女のような未成年の看護見習いも、みんな同一賃金をくれたので、これでは「不平等」ということで、日本人だけ集まって給料を全員から回収し、それなりの役柄に応じて再配分

したという。

30年前にその彼女の父親、つまり私にとっては母方の伯父の葬式に行って以来の再会である。伯父、つまり母に兄がいるというのを知ったのは、私がもう成人してからだった。それまではまったく知らないかったのである。母にしても、60歳を過ぎて、隠していた今までの過去を、子どもたちに話し、また自分自身も高齢の「兄」と交流をしなければ、と思ったのである。

過去を隠していた理由はこうだ。母の母が、その昔、後妻に入ったのである。そのあとに生れたのが、母の姉妹だった。だが生き別れの先妻の子が、それも男子が2人いた。その男の子にとっては、祖母はいわば継母になる。なぜ先妻が、

子どもを置いて帰ったのか、そのころどのような生活をしていたのか、分からぬ。

残された2人の男の子は、継母の元で育った。いや育っていたのだが、すぐに家を飛び出した。おそらく未成年のときであろう。そのころは16、17歳で丁稚奉公に出されるのがあたりまえの時代ではあったが、兄は東京の鉄工所の職工見習いに、弟もそのあとを追つて東京に出た。家出同然だったろう。兄はその後北海道に渡ったという。2人とも、よほど継母のもとで居心地が悪かったらしい。気の強い祖母であった。それに腹違いの、つまり私の母の姉妹が次々に生れた。

とにかくそのころの情況は詳しいことは分からぬ。その北海道の、明治32年生れた伯父というのが、30年前に亡くな

り、その葬式に来たのが、私が函館に来た最後だった。その伯父の娘、今は85歳の娘が私にとつていとこであった。イカ釣り舟の入る港の家から、山の手の湯川の温泉に近い、そしてトラピスチヌ修道院にも近い、住宅街に新しい家を建てていた。庭も広い。

亡くなつた伯父についても、詳しいことは分からぬ。家出して東京に来た弟を、自分の勤める鉄工所に入れておいてから、自分はひとり北海道に渡つたといふ。いい仕事があつたら、弟を呼び寄せるつもりだつたらしが、ついに実現しなかつた。大正の初めはまだ北海道も開拓の時代で、多くの人が一攫千金をもくろんで北海道に渡つたという。伯父もそこのひとりだつたのだろう。

生前に一度だけ私が直接伯父から聞いた話では、何でも小樽から船に乗つて、カムチャツカに渡り、ソ連の蟹の缶詰工場で働いたこともあるという。獲れた蟹をできるだけ早く缶詰にするために、シンズンになると人手はいくらあっても足らないくらいだつたから、現地ではいつでもすぐに雇つてくれたとも。そのころはバスポートとかビザとか、そんなものはなかったから、好きなときに船に乗つて

ロシアに行けたらしい。私はカムチャツカの工場で、伯父がロシア人に混じつて、蟹をさばいている光景を想像した。

これも母の生きている時代に聞いた話だけれど、伯父が北海道に渡つたのは炭鉱で働くためだつたという。九州の筑豊炭田に少し遅れて、北海道でも石炭は黒いダイヤといわれ、明治以降の日本の産業革命の推進力だった。西日本では「遠賀川沿いの煙突（つまり炭坑）を目指していけば、すぐに戻つてくれ、毎日銀シャリが見える」といわれたように、北海道でも各地で石炭が掘られた。なかでも、

空知、夕張の石狩炭田は埋蔵量が日本一といわれた。時給がよかつたか、あるいは目先の給料が高かったのか、伯父は宣伝文句につられて北海道に渡つた。

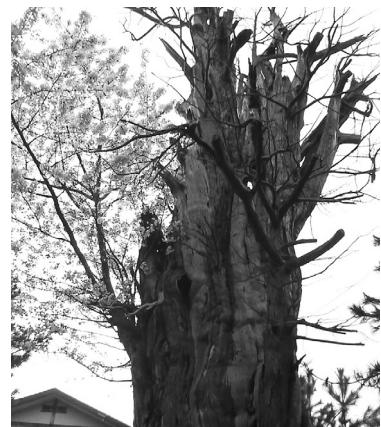
ところが、それが戻だつた。いったん炭坑の宿舎の「たこ部屋」に入ると、厳しい重労働が待つていて、やめようにもやめれない。しかも逃げようにも監視がついていたと。遊廓と同じで、支度金とかも北海道までの旅費とかいろいろな前借り、契約をタテに、何年間かは「たこ部屋」から抜け出せないので。

母からの間接的な話だから、どこの炭鉱か、どこまで本当の話か詳細は分からぬ。今となつては確かめようもないの

だ。しかし「たこ部屋」の話は若い私にとって強烈だった。多くの若者が、甘い言葉につられて、北海道の炭鉱に出稼ぎに行つたのだろう。

とにかく、無一文で北海道に渡つた伯父は、その後、いろいろな仕事を転々とし、晩年、私が逢つたときは、タイル貼りの職人であった。少し昔は、風呂場や流しがタイル貼りで、これを貼るには特殊な技術があり、日当もかなりいいと聞いていた。娘の建てた新築の家の風呂場は、特別に彼がタイルを貼つたという。とにかく伯父は波乱の人生を送つている。

朝食前、いとこの家から、朝の散歩に出た。住宅街といつても緑が多く、春とはいえまだ肌寒かった。もともと、街路樹や、よその家の庭の木や花を見て歩くのが好きで、知らない町のしかも日ごろはなじみのない北海道の草木である。本土ではお目にかかるないような直径1メートル以上の大きな針葉樹が何本も生えている庭もある。立ち枯れて木肌のない木の空（うろ）から、桜の木が生えていて、それが枝を一杯広げてちょうど花が満開であった。桜はよく空から生えることがあるが、土台の木も大きく、また咲いた桜も見事だった。桜が生えている空が、



枯れた大樹の空（ウロ）に生えた桜の木

岩船屋という呉服商の別荘だったのだそうだ。それにしても広い別荘である。

すでに4メートルも上にあり、そこから

桜が生えているので、高くて何という桜か分からぬ。まるで巨大なオブジェか、前衛の生け花のように見える。さすが北海道はスケールが違うと思った。

10分ほど北に向かうと、公園があつた。「見晴公園」と書いて「みはらし」と読む。

住宅街にある公園と思って何気なく入ったが、かなり大きかった。入るにしたがつて、どんどん奥が深くなる。杉や、ヒノキ、楓の林がある。赤松もある。大きな池があつてその傍らに書院造りの茅葺きの古風な邸宅。少し離れたところに洋風の古い大きな温室もあつた。あとで分かつたことだが、なんと4万坪以上あるといふことだった。これは並の公園ではない。

これも後に聞いた話だが、この公園は「香雪園」と言って、もとは函館の豪商、

話が横道にそれるので承知であえて説明すると、この別荘のもとを作ったのは、新潟出身のヤスという女性。江戸時代の文政15年（1818年）の生れだという。

一度は結婚したが亭主が大酒飲みで離婚。ヤスは父親をはじめ一家を連れて函館に来る。心機一転、新天地を求めてのだろう。

最初は駄菓子の行商から始めたが、父親が死亡。伝聞によるとその父親の遺骨を持って、ヤスは高野山に行つたのだという。本当かどうか分からぬが、そこで上方の親切な呉服屋と知り合い、綿の下着や、呉服の商売を函館でするように勧められた。援助も受けたかもしれない。おそらく上方で仕入れた反物や呉服を、北前船で小浜か敦賀から函館に運んだのであろう。

ヤスは誠意を持って商売に励み、店は次第に大きくなり北海道の各地に販売するようになつたという。のれんは2代目岩船峰次郎、3代目峰次郎と受け継がれ、函館では押しも押されぬ豪商になつた。

岩船という名字は、ヤスが新潟の岩船郡出身だったから。岩船屋は明治35年から

別荘のあつた「香雪園」の造園に取りかかり、2代目、3代目を通じて、たくさん木を植え、池をつくり、大きな庭石を入れたという。

しかし、岩船屋は、単なる豪商ではなく、ヤスの時代から貧しい人たちにも目を向け、常に庶民の側に立つて数々の慈善事業もやつていたから、庭園も早くから一般に開放した。自分も赤貧を洗うよう生活の中から立ち上がつたからだ。今では函館市の庭園として古風な別荘とともに「名勝」、国の文化財にも指定されている。

広い庭園である。朝早いから誰もいない。私は杉やオンコの林を縫うように歩いたが、ふと気がつくと、足元の小道から少し離れたところに、小さな石碑があ



函館見晴公園の「日朝友好の桜」碑

るのを発見した。注意しないと気がつかないほどの灰色の自然石の石碑である。近づいて、しゃがんで読むと、「日朝友好の桜」と書いてある。昭和44年、函館市が建立している。

「日朝」？と私は考えた。日韓ではない。するとこれは北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国に関係のある石碑ではないか。しかも「桜」とあるのも意味が分からぬ。

そこで私は、園内の案内所を尋ねた。「緑のセンター」といい、研修室や図書館、休憩室やホールもある立派な建物である。学芸員というか緑化普及担当の女性（中者徳子さん）に聞くと、意外なことが分かった。

今から57年前、昭和34年（1959年）に函館近辺にいた朝鮮の人たちが祖国「北朝鮮」に集団で帰ったのである。そのときに彼らが記念に、桜を千本、この香雪園に植えて行つたのだという。私はびっくりした。石碑は、桜植樹の記念に、函館市が、木を植えてから10年後にこの「日朝友好の桜」の碑を建てたのだという。「革新」の市長だったと。植えてから10年もたち、そのころおそらく桜が大きく育つて見事な花を咲かせていたのだろう。

今ではあまり話題にもならないし、若い人は知らない人が多いと思うが、戦後1960年代に、日本にいた多くの朝鮮の人たちが祖国に帰るという運動が起きた。戦前に朝鮮から日本に来た人々は、戦後朝鮮がふたつの国に別れたためにどちらに帰るかが問題であった。南北分断である。北は社会主義国、南は自由主義体制であった。

運動は、北朝鮮に帰る「北朝鮮帰還運動」である。南の韓国政府は当然のことながら、日本にいる朝鮮人が北に帰ることに反対した。在日の朝鮮の人たちは南北から来た人も多かつたからである。

しかし、1959年の12月14日、新潟港からの第1陣を皮切りに、多くの朝鮮人が集団で北朝鮮に帰つた。その後84年まで帰還運動は断続的に続き、全部で、9万3000人以上。その中には、朝鮮の人と結婚した日本人妻や子どもたち、つまり日本の国籍を持った人も7000人近くいた。戦前に南朝鮮（韓国）から来ている人も多く、また親や兄弟は北にいる人も。朝鮮動乱で、戦乱を避け、北から南に移動した人も多かつた。

「北朝鮮への帰還運動は、当時は日本の多くの新聞社も、とくに「知識人」はこの問題に対しても一貫して北朝鮮に帰ることに「賛成」だった。多くの学者や歴

い」という甘言にノせられて、やつてきた人も多い。もちろん、戦前は日本と朝鮮は一体だったから、自主的に出稼ぎに来た人もいる。戦後は、終戦から3年後、1948年に起こった犠牲者6万人とも言われる済州島民虐殺事件、1950年に勃発した朝鮮戦争の逃避者もいる。いずれにしても、多くの朝鮮の人たちが戦後の日本にはいた。その人たちが「祖国北朝鮮」に帰つたのだ。この問題に韓国は一貫して反対し、日本にいる工作員や、あるいは韓国から潜入した工作員が帰還の妨害工作まで行った。その1つが新潟帰還事務所の爆破である。在日朝鮮人が、韓国ではなく、社会主義の朝鮮民主主義人民共和国に帰るのは、政治的にも韓国にとつては大きなマイナスになるからであった。その韓国もまだ貧しかった。私も昭和46年（1971年）に韓国をひとりで回つたが、韓国は朝鮮動乱のあとまだ復興できないでいた。小さな子どもが街頭でたばこを1本、2本とバラで売つていたし、貧しい人たちが多くつた。

北朝鮮への帰還運動は、当時は日本の多くの新聞社も、とくに「知識人」はこの問題に対しても一貫して北朝鮮に帰ることに「賛成」だった。多くの学者や歴

史家さえも、社会主義に対し理想郷を夢見ていたからである。

北朝鮮の日本での司令部である朝鮮総連は、北朝鮮は「地上の楽園」であると宣伝した。日本の新聞にもこの文字は踊つた。このころ出版された、寺尾五郎の『38度線の北』は北朝鮮讃美の典型的な本である。

私が覚えているのは、ずっとあとだが中国で文化大革命が吹き荒れていたころ、北京にひとりだけ「追放」されないで残つていた朝日新聞の秋岡家栄特派員が、人民日報の報じる記事を連日1面で転載し、結果的には「文革讃美」を繰り返したことである。しかも北京から平壤に飛び、わずか3、4日滞在して、当局の話を聞いただけで（そのころは北京特派員が北朝鮮もカバーしていた）新聞の全頁で「発展する北朝鮮の農業、工業」というタイトルでトラクターなどの写真を載せ、大特集を組んだことである。北朝鮮は「理想」の社会主義国家であった。秋岡家栄はその時の「功績」により、その後日本における人民日報の総代理人となつてゐる。

その「地上の楽園」である祖国に帰つた人たちが、実はそうではなく、かなり困窮な生活を余儀なくされている、言論

の自由がない。それにどこに行つたか分からなくなつた人も多い——、ということがささやかれるようになつたのは、ずっととある。亞紀書房という、社長が私と同郷の小さな出版社が出した『凍土の共和国』などは北の実態を告発した数少ない本の1冊である。

当時函館近辺にいた朝鮮の人たちは4000人いたという。そのうち何人が北朝鮮に帰つたか知らない。しかし、その人たちが日本を去るにあたり、なんと桜を見晴公園に千本植えて行つたというのだ。彼らはけつして日本に対していい印象を持つていた人たちばかりではなかろう。つらい思いの方が多いかったのではないか。それは、「たこ部屋」に詰め込まれていたり、あるいはカムチャツカまで出稼ぎに行つた私の伯父だけではなかつたろう。とくに戦争末期の、2、3年間は多くの日本人も塗炭の苦しみを味わつたし、まして朝鮮の人たちにおいてはである。

記録によると、この時植えられた桜は、ソメイヨシノ、普賢象、関山（かんざん）ほか——、となつてゐる。北海道に自生の大山桜をのぞいてはおそらく里桜、いわゆる園芸種が多かつたと思われる。私は最初、なぜ桜なのか疑問に思つた。朝

鮮の人たちなら「木槿（むくげ）」が最初に頭に浮かんだからである。朝鮮の人たちが自分たちがここにいたあかしに、思われた。それをあえて日本人の好きな、桜にした——。

私が子どものころ、田舎の近所の家に紫の花の咲く木槿の木が1本あった。夏になるとたくさんの花を一斉に咲かせる。そして暑い夏の間中、毎日次々に咲き続けるのだ。母がいつも「きれいねー」と言つていた。そういつた花のある家がうらやましくもあつた。今東京のわが家にはこの紫の木槿が満開である。

夏に咲く花は、百日紅（さるすべり）くらいしかないから、木槿はとても貴重である。百日紅にも白、赤、ピンク、そして紫もあっていろいろだが、群がつて咲く百日紅は、やはりなんとなく余計、夏が「暑い」気がする。余談であるが、夏の暑いときに、観光客の多い「広島」の平和大通りには、この百日紅の花が街路樹としてたくさん植えてある。「八月の広島」だからである。

脱線ついでに、百日紅について話すと、私はアメリカで不思議な体験がある。1984年にルイジアナ州ニューオーリン

ズに行つたことがある。ジャズで有名な町だが、もともとはフランスの植民地で、カソリックが多い。その町の中にある、白い教会（セントルイス大聖堂ではない）の周囲の広場がまるで芝生のような紫の花で埋められていた。何だろうと思って近づいて見たが分からぬ。しゃがんでみると、なんとそれが百日紅だった。高さ10センチほどの百日紅が、まるで芝生のようにならぎつりと植えられているのだ。私は驚いた。百日紅の木がこのように植えられているのを見たのは初めてだった。なるほどこのようにすると芝生のよう見えるのかと。日本では、その白い斑点のある茶色の幹も鑑賞するということで、日本庭園には必ず植えられている百日紅である。所変われば、まったく違う植物のように見えるのも不思議だった。しかも背景は白い教会である。

不思議だったのは、その白い教会の隅に巨大な樹が4本植わっていたことである。これがなんと泰山木（たいさんぼく）だった。ご承知のように、泰山木は中国でも古くから格調のある品のいい木として大切にされている。白い花びらの大きなマグノリアである。この木で有名なのは上海の魯迅公園である。私の田舎の庭にもあつたからよく知っている。6

月になると大きな白い花が次々に咲いていた。そのもつとも東洋的な木だと思つて、泰山木が、なんと教会のシンボルとして植えられているのだ。百日紅といい、泰山木といい、場所によつてはまたたくイメージが変わるものだと思い知られた。樹にもそれぞれ「人格」があるが、まるでその人格が変わったようだつた。

話をもとに戻そう。

桜は向日性の木である。日が当たらぬと成長しない。それに園芸種だと余計、病気や害虫、風雪にも弱いのである。寿命も長くないと思われる。そのためか、「日朝友好の桜」の碑のまわりに桜を搜して歩いたが、40年たつというのにあまり木が残っていないのである。あっても細い、枝の少ない今にも倒れそうな木ばかりであった。「千本の桜」の面影はほとんどないといつていい。おそらく周囲の針葉樹、常緑樹の成長に押されて、木の勢いが衰えたのである。北朝鮮に帰つた人たちが、どのような思いで、自分たちのいた函館に「桜」を千本、残して行つたのかその思いは計るべくもないが、いずれにしてもわずかばかりの木しか残つていないのである。この公園に来る多くの人も小さな石碑には気がつかないだろう。

桜は向日性の木である。日が当たらぬと成長しない。それに園芸種だと余計、病気や害虫、風雪にも弱いのである。寿命も長くないと思われる。そのためか、「日朝友好の桜」の碑のまわりに桜を搜して歩いたが、40年たつというのにあまり木が残っていないのである。あっても細い、枝の少ない今にも倒れそうな木ばかりであった。「千本の桜」の面影はほとんどないといつていい。おそらく周囲の針葉樹、常緑樹の成長に押されて、木の勢いが衰えたのである。北朝鮮に帰つた人たちが、どのような思いで、自分たちのいた函館に「桜」を千本、残して行つたのかその思いは計るべくもないが、いずれにしてもわずかばかりの木しか残つていないのである。この公園に来る多くの人も小さな石碑には気がつかないだろう。

その千本の桜の名残を、接ぎ木して、あるいは芽を継いで、残そうとしている人がいることを、前述の緑のセンターの中者徳子さんが教えてくれた。北海道新函館では有名な「桜守」の浅利政俊先生（もと小学校教師）が、自分の家のオオシマザクラの台木に見晴公園の友好の桜の芽や枝を継いで、育てているというのである。そのうちの1本、普賢象を、2001年に新たに見晴公園に植えた。1959年に朝鮮の人たちが植えて行った千本の桜は、今では百本ほどがからうじて残っているとも。浅利先生はその人たちの思いを、後世につなごうと思ったのだ。このままほおつておくといずれ消滅してしまう。

「40年前に函館を後にした人たちが、あるいはその2世、3世でもいい。いつの日かここに帰つてきて、この桜を見てほしい。そういう日が来ることを願つていい」と浅利先生。半年後、函館の北、生れ故郷の七飯町に先生を訪ねた私に、先生はそうおっしゃつた。浅利先生は、小学校の先生をしながら、桜の品種を10種類以上作り出した人で、「桜守」として有名。松前城の桜を保護育成した。

昭和6年（1931年）生れ、浅利政俊85歳。彼がなぜ、帰国した朝鮮の人たちに、思いを寄せるのかというと、それには理由があった。

浅利先生が12歳のとき、昭和18年のことである。近所の素封家の家に、竹本和夫という青年が居候をしていた。実は竹本という青年は日本名で、本当は朝鮮人であった。それだけなら珍しいことではない。函館ではあちこちに朝鮮人労働者がいたからである。上磯（現北斗市）の太平洋セメント工場の作業員として、そのセメントの原材料をとる岩手県鉱山の石灰石の採掘と運搬作業に、また戦前の青函連絡船の桟橋であった有川桟橋では荷物の陸揚げ、積み出し、また函館ドックで働いていた人たち、あちこちに朝鮮の人たちは大勢いたからである。

素封家Sの家はかつて村委会員までやつた家だが、息子を兵隊にとられて、働き手がないなくて困っていた。それで竹本青年に畠や田んぼの仕事、馬の世話を手伝つてもらっていたのである（当時日本中の町や村には、男の数が極端に少なかった。みな兵隊にとられていたからである）。

実はこの竹本青年は、空知の炭坑の

「たこ部屋」から逃げ出して来た労働者だった。つまり「追われる身」だったのである（当時石狩炭田は日本最大の炭坑で、北を空知炭田、南を夕張炭田といつた）。

竹本青年が、どのようにして函館まで逃げて来たのか知らない。おそらく本土へ一番近い函館まで来て、身を隠してS家で働いていたのである。村の警察官が近くに来ると、彼はすぐに馬小屋の奥の2階の藁の中に潜って隠れていた。

当時12歳だった浅利先生は、兄といっしょによく竹本青年に遊んでもらったといふ。近所の川でも泳いだ。彼はすでに朝鮮で大学を出ていてたくさんの知識も持ち、いろいろなことを浅利兄弟に教えてくれた。朝鮮の歌も教えてもらった。アリランの歌も、日本語と朝鮮語の両方を教えてもらったのである。

ところがある日、戦争も押し迫った昭和19年か20年に、竹本青年はどうしても故郷の母親に会いたいから朝鮮に帰るといいだした。

津軽海峡を渡つて新潟か、あるいは本州の下関まで行き、日本海や玄界灘を渡るというのである。まず竹本青年は貨物列車に隠れて乗り、青函連絡船で青森を目指した。貨物列車に隠れて乗るのに、浅利先生と兄が手引きをしたという。浅

利兄弟は途中まで見送りに行つたが、そのとき手を振つて別れたのが生涯の別れとなつた。竹本青年はその後どうなつたか、消息は現在までまったく分からぬ。果たして朝鮮まで帰れたのか、青森までたどり着けたかどうかも分からぬままである。

それから73年、浅利先生も85歳になつた。竹本青年は浅利先生より、10歳は年上であつたろう。なにしろあの時は終戦前のどさくさである。あるいは日本のどこかに、そのままいるのではないかと思つたりしたことであつたが、おそらくもう生きていまい——。

見晴公園に残る朝鮮の人たちが植えて帰つた桜。その桜が今、そのすべてが枯れてなくなろうとしている。浅利先生は、多くの「北に帰つた人たち」の植えた桜、夢を託した桜を、今1本1本、再生させようとしているのである。今でも、その人たちが北朝鮮のどこかで、日本を去るとき植えて行つた桜のことを思い出しているだろうか。いつかは、その子どもが、あるいは孫が、再びここに来て、この桜を見てほしい——。浅利先生はまた、戦後もずっと函館に残つてゐるさまざまなおなじみの「人生の書き書き」を続いている。